

# 西土居古墳群

—香川県木田郡三木町大字井戸字西土居における群集墳の調査—

1983年3月

西土居古墳群発掘調査団

## 例　　言

1. 本報告は、県道多和一三木線道路改修工事に伴って発掘調査された、木田郡三木町大字井戸字西土居所在の後期群集墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は、香川県の委託を受け、筒井 元（三木町文化協会会长）を団長とする西土居古墳群発掘調査団が、昭和57年10月26日から同年12月6日まで実施した。
3. 調査の実際は、香川県教育委員会文化行政課主任技師 渡部明夫の指導を仰ぎ、又、同森本義臣の応援を得て、県文化財保護指導委員 細川幸雄、三木町教育委員会 酒井敏治、同柴原健二らがあたり、調査作業員として大垣シズエ、大垣美子、鈴木善美、篠原秀子らの協力を得た。
4. 本報告の執筆は、Iを細川幸雄、IIを柴原健二、III・IVを渡部明夫が分担した。
5. 本報告の編集は渡部明夫が行った。



# 西土居古墳群

## 本文目次

I 立地と環境.....	1
II 調査の経過.....	3
III 調査の内容.....	4
1. 古墳群の分布.....	4
2. 1号墳.....	5
3. 2号墳.....	8
4. 3号墳.....	14
5. 4号墳.....	15
6. 壺棺.....	18
IV まとめ.....	19

## 挿 図 目 次

第1図 西土居古墳群と周辺の遺跡	1
第2図 西土居古墳群分布図（2号墳～4号墳）	4
第3図 西土居古墳群遺構配置図	5
第4図 西土居古墳群出土々器実測図(1)	6
第5図 西土居古墳群出土々器実測図(2)	7
第6図 西土居 2号墳々丘土層実測図(1)	8
第7図 西土居 2号墳々丘土層実測図(2)	9
第8図 西土居 2号墳石棺実測図	9
第9図 西土居 2号墳棺内遺物出土状態実測図	10
第10図 西土居古墳群出土玉類実測図	11
第11図 西土居古墳群出土鐵器実測図(1)	12
第12図 西土居古墳群出土鐵器実測図(2)	13
第13図 西土居 3号墳土壤状落込み実測図	14
第14図 西土居 4号墳々丘土層実測図	15
第15図 西土居 4号墳石棺掘り形及び遺物出土状態実測図	15

## 表 目 次

第1表 西土居 2号墳出土玉類計測表	11
第2表 西土居 4号墳出土玉類計測表	17

## 図 版 目 次

図版 1 (1) 西土居古墳群の立地（3号墳より1号墳跡・2号墳をみる）	
(2) 2号墳の調査風景	
図版 2 (1) 2号墳	
(2) 2号墳石棺と遺物出土状態	
図版 3 (1) 2号墳石棺内遺物出土状態（須恵器）	
(2) 2号墳石棺内遺物出土状態（鉄斧・刀子）	
図版 4 (1) 4号墳（手前）及び3号墳（調査前）	
(2) 3号墳土壤状落込み	
図版 5 (1) 4号墳内部主体	
(2) 4号墳勾玉・ガラス玉出土状態	
図版 6 西土居古墳群出土遺物	

西土居古墳群の位置と周辺の遺跡について、その立地と環境について述べる。

## I 立地と環境



- 1 西土居古墳群
- 2 カンカン山古墳
- 3 刺山古墳
- 4 西山古墳
- 5 野倉古墳
- 6 天満古墳
- 7 中代古墳  
(静薬師古墳)
- 8 丸井古墳
- ×印 弥生土器出土地  
(9は壹棺出土地)

(1 : 20,000)

第1図 西土居古墳群と周辺の遺跡

西土居古墳群は、木田郡三木町大字井戸字西土居にあり、三木町の平野部の南東にあたるところである。

この西土居は、鹿庭、氷上、井戸地区の接点で、井戸地区の南西によつた一部が、新川をこえて西へ突き出たところで、俗にいう入り地である。新川の西側を南北にのびる細長い集落で、川原や川手にまつわる土居という地名がつけられている。

この土地の南端の丘陵が、北東にむかって半島のように突き出ている丘に西土居古墳群がある。1号から6号と名付けられる古墳が、30m~40mの間隔を保つて奥に向って、年代の古い順に形成されている。

この付近にはこれまで、ほとんど遺跡は知られていなかった。この集落の北西部にあるカンカン山古墳群は、昔から多くの出土品が見られる。とくに太平洋戦争中には開墾されて、多くの古墳が破壊された。今でも丘陵上部に横穴式石室の巨石が露出している。

南には古くから伝わる刺山古墳があり、さらにその南にはほとんど破壊されて一部分の石を残す西山古墳がある。

新川の東側の鹿庭には、天満古墳がありその南には、野倉古墳がある。これらの古墳は、平地部周辺につくられた終末期の横穴式石室墳である。

この丘と西側の尾根の間の谷を、昔から幕谷と呼んでいる。土地の老人たちの話では昔は大きな寺があったという。現在は棚田状の水田になっているが、その水田や、あぜから土器や瓦が多く出たということである。周辺を調べて見ると、塔の先端部らしい石造物などが見られるがおそらく中世の遺跡ではないかと思われる。

この丘陵部の高さは70m～80m程で、見た目には低くて、全体にちゃちである。なぜこんなところを古墳の場所にしたのか不思議に思うが、上にのぼって見ると実によい景観である。南はとざされているが、真東には長尾の丸井古墳がありその間の距離は約1km位である。北を見れば、巌山、白山がありそこには三木町の中心部の平野の広がりが一望できる。さらに北方には屋島、八栗を望み、瀬戸の島々が見えるすばらしい眺である。まさにこの地の長の墓をつくるにふさわしい場所であるといえよう。

周辺の調査をしているうちに、下の畑のあぜから弥生時代後期前半ごろの土器破片が多く出てきた。さらに発掘を進めているうちに、6号墳のすぐそばと、その南約30m位はなれたところから弥生時代の後期とおもわれる壺棺が出土した。どちらも東側からである。

これらから見て、幕谷という地名は、新しいものではなく、ずっと大昔からそう呼ばれていたのではないだろうか。この地に弥生墓がつくられそのあと古墳時代が終るまで、土地の人々にとってこの丘は、中心者を葬る大切な場所であったと考えられる。 (細川)

## II 調査の経過

西土居古墳群は、昭和57年6月30日、県道多和一三木線道路改修工事で1号墳がショベルカーにより破壊され、須恵器が4個ほどほぼ完全な形で採集されたことにより発見された。

このため、工事監督者である長尾土木事務所より遺跡を発見した旨の届出を受けた三木町教育委員会では、早速、香川県教育委員会文化行政課へ通知するとともに、関係者による協議を行った。同年7月3日、三木町の要請を受けて、県教委文化行政課より渡部明夫主任技師が派遣され、現地調査を実施した結果、小規模な墳丘をもつ古墳群ではあるが、地上に露出している4号墳(これより後に名付けられた名称)の箱式石棺の形式が、外部から見る限りにおいて、他にあまり例を見ない形であることから、なお詳しい調査が待たれるとのことであった。そこで、工事主任者である県土木課と県教委、三木町教委の三者で遺跡の取扱いについて協議した結果、道路工事の関係上、遺跡を現状のまま保存することは困難であるとの結論に達し、同年10月19日、西土居古墳群発掘調査團が結成され、団長に三木町文化協会会長筒井元、調査委員として三木中学校長出井健一、県文化財保護指導委員細川幸雄らがあたり、香川県の委託を受けて、遺跡の記録保存をすることが決定された。

発掘調査は、昭和57年10月26日から12月6日までの間、県教育委員会文化行政課の渡部明夫主任技師の派遣、指導を仰ぎ、調査團が主体となり実施された。当初の墳丘実測では県教委文化行政課の森本義臣主任技師の応援派遣を受けた。調査には主として渡部明夫主任技師、細川幸雄、町教委の柴原健二らがあたった。

1号墳はすでに消滅していたため、不明であるが2号、4号墳は箱式石棺であり、6世紀後半でも古い時期より6世紀末に至るまでに順次築造されたものと思われる。道路改修により失われてゆく4基の古墳の調査は12月6日、数々の成果をおさめつつ終了したが、当該丘陵南部になお2、3基の古墳が残存する可能性があり、また西土居古墳群全貌を明らかにするためにも、その後、昭和57年12月13日から同58年3月20日まで、三木町教育委員会の手により発掘調査が進められた。その結果、5号墳は土壙墓を内部主体とし、6号墳は小形の横穴式石室を採用しており、この横穴式石室で西土居古墳群が終りを告げていることが判明した。また同年1月27日に、4号墳西側溝状部から県下でも珍しい巨大な須恵器大甕が出土したことにも収穫の1つであった。

最後に、5号墳、6号墳の測量、実測を引き受けてくれた片桐孝治君(当時奈良大学生)に改めてお礼を申しあげたい。

(柴原)

(註)

1. 調査の結果、これは盜掘後に作られた石圓いであることがわかった。

### III 調査の内容

#### 1. 古墳群の分布（第2・3図）

西土居古墳群は5基ないし6基の円墳で構成される。ただ、3号墳は調査によっても古墳の確認は得られなかったので、これを除くと5基になる。今回の調査は、工事に関わる1号墳から4号墳について実施された。

これらの古墳は北東にのびた尾根上に並び、先端から奥に向って1号～6号墳と呼称される。1号墳は丘陵先端の台端部に立地していたが、土取り工事によって完全に破壊され、わずかに須恵器のみが採集された。

2号墳はさらに15mほど奥の、1号墳からほぼ平坦に続く尾根上に立地する。工事によって、箱式石棺の近くまで、墳丘の南東側が大きく削られていた。

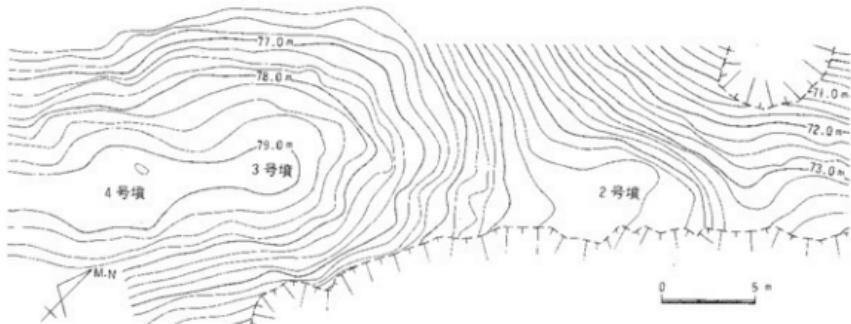
2号墳から約14m奥の、尾根が一段高くなったところで、土壤状落込みが検出された。これを3号墳と称しているが、周溝や盛土もなく、古墳の確認は得られなかった。

4号墳は3号墳に隣接する。周溝は確認できたが盛土はすでに流失し、全く存在しなかった。

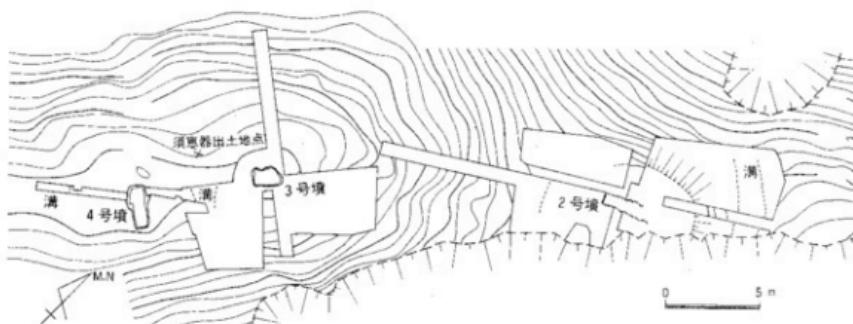
以上の古墳のさらに奥で、調査中に2基の古墳と、壺棺と思われる弥生土器を発見し、2基の古墳は今回の調査後に、三木町教育委員会が調査した。

5号墳は4号墳から約36m離れた尾根上に立地し、盛土は流失していたが、土壤墓を内部主体とする。須恵器片と、弥生土器かと思われる土器片を少量検出した。

6号墳は、5号墳からさらに27mほど奥の尾根上にあり、小形の横穴式石室から刀子片や須恵器杯・提瓶などを出土している。須恵器は6世紀末ないし7世紀初頭頃に位置づけることができる。なお墳丘の調査によって、壺棺と考えられる弥生土器も検出した。



第2図 西土居古墳群分布図（2号墳～4号墳）



第3図 西土居古墳群遺構配置図

さらに、この尾根の最高所に近い東側（第1図9）でも漆棺と思われる弥生土器片が採集され、本報告に紹介することができた。

## 2. 1号墳

**墳丘及び内部主体** 2号墳から15mほど離れた丘陵先端に位置していたが、工事のため、調査されることなく破壊された。その際、あまり大きくない石が少量出土したことを伝え、約40cm大の板状石材が実際に採集されているので、内部主体は2号墳と同じ箱式石棺であったと考えられる。

**出土遺物（第4図1～13）** 須恵器杯蓋4・杯身3・無蓋高杯1・有蓋高杯蓋2・有蓋高杯身2・短頸壺1などが採集された。

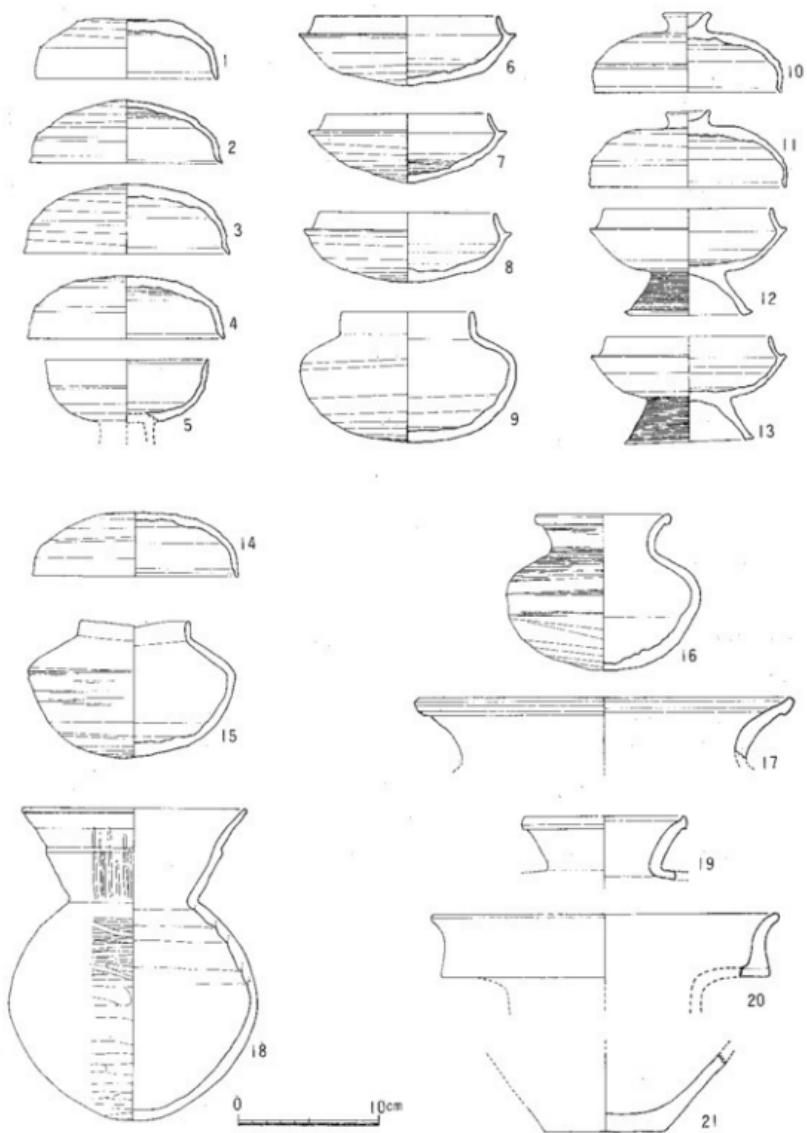
杯蓋（1～4）は、直径13～14.7cm、器高4.3～4.95cmの大きさで、体部は比較的直立し、天井部は高い。口縁部内側には稜を持ち、体部と天井部の境にはかすかながら沈線や段が認められる。

杯身（6～8）は、受部の直径14.1～15.5cm、器高4.9cmで、立上りは縁部を丸くおきめ、内傾するものの、約1.3cmの高さである。蓋・身とも、外面からみて時計回りにヘラケズリを施している。

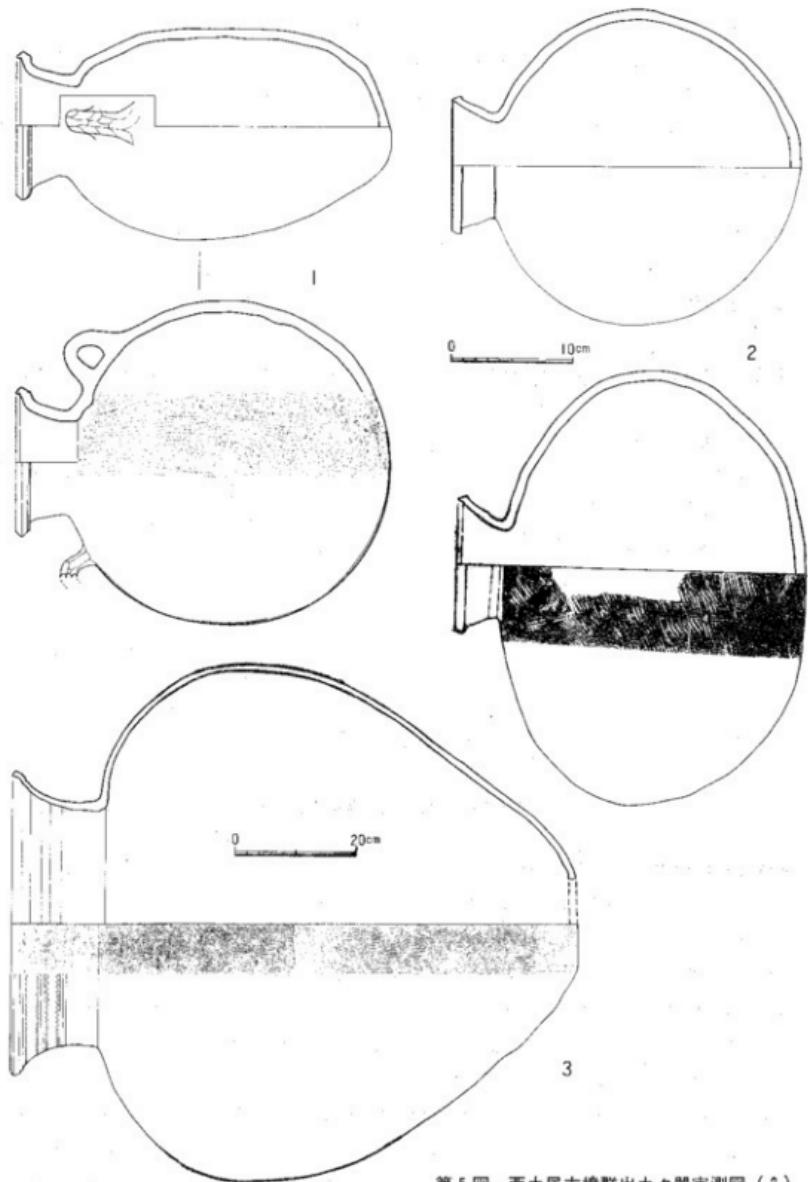
無蓋高杯（5）は口径11.6cmで、体部外面に鈍い段を、口縁部内側に沈線をめぐらす。

有蓋高杯蓋（10、11）は、杯蓋に比べて体部はより直立すると共に外膨らみとなり、体部と天井部の境には明瞭な段をもつ。天井部には直径3.2～3.5cmの大きなつまみが付く。口径は13.3～14cmである。

有蓋高杯身（12、13）は、透し穴のない低い脚部を持つもので、口径11.6～12cm、器高7.4～7.6cmを計る。不明な13を除くと、有蓋高杯は蓋・身とも逆時計回りにヘラケズリを施している。



第4図 西土居古墳群出土々器実測図（1）



第5図 西土居古墳群出土々器実測図 (2)

脚部にはカキ目が著しい。

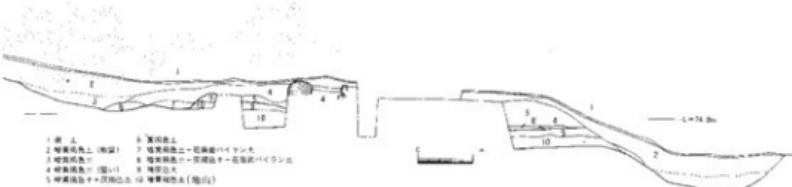
短頸壺（9）は、口径 9.4cm、体部最大径 15.4cm、高さ 9.3cm で、内面から体部外面の中央やや下までをヨコナデとし、それ以下に時計まわりのヘラケズリを施している。

以上の須恵器は、杯蓋 3 がやや軟質であるほかは堅緻な焼成である。また、杯蓋 2~4、杯身 7・8 の天井部内面には叩き目が残されている。

### 3. 2号墳

**墳丘（第 6 図）** 丘陵の基部側と先端側を溝状にカットし、内部に盛土して円墳状の墳丘を構築している。ただ、丘陵の尾根幅が狭いため、墳丘は正円とはならず、東西に長い楕円形である。

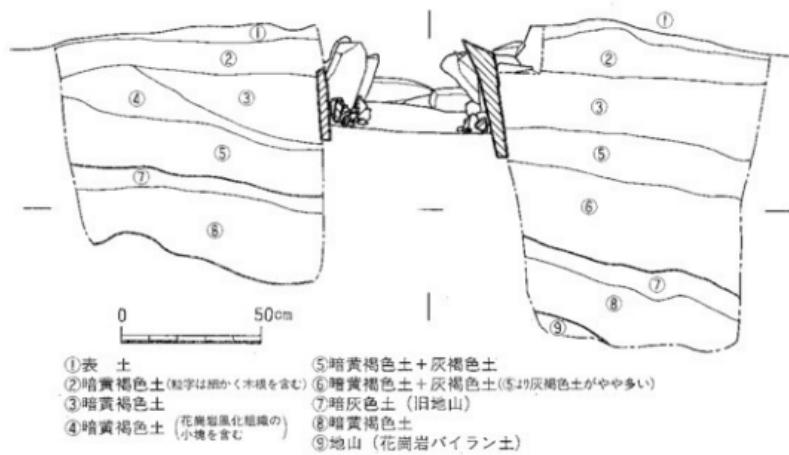
また、溝は丘陵基部側を浅く、先端側を深く掘っているため、両者の溝の底は約 1.4m の高低差を持つ。両溝の溝底内側間の距離（南西—北東）は約 10.36m である。盛土は、旧表土上に、地山である花崗岩バイラン土を盛上げる。尾根筋にあたる墳丘の盛土は低く、0.4~0.6m しかないが、北西側と南東側は厚く、1~1.7m ほど認められる。



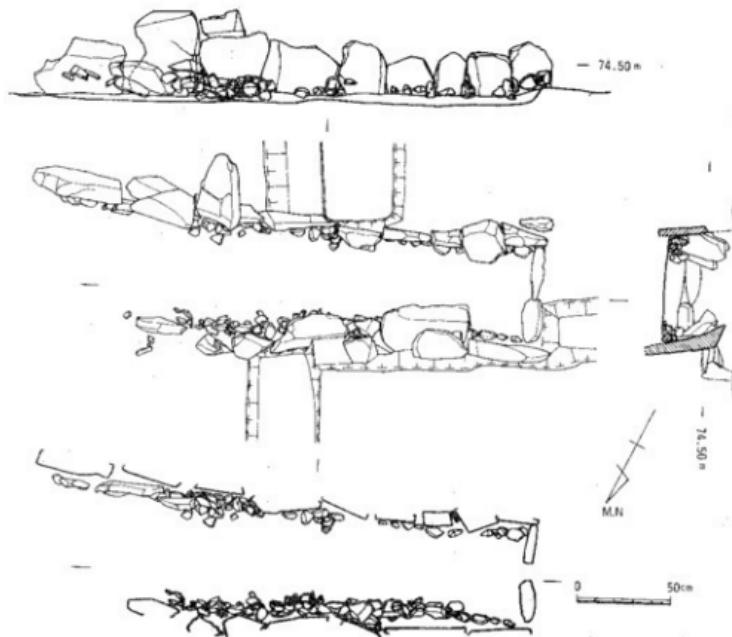
第 6 図 西土居 2 号墳々丘土層実測図（1）

**内部主体及び遺物の出土状態（第 8・9 図）** 2 号墳の内部主体は花崗岩の割石を用いた箱式石棺で、頭部と思われる東側小口は破壊され、天井石も見当らなかった（第 8 図）。現存での長さ約 2.6m、西側小口幅 0.56m、東側小口に近い部分で 0.63m を計る。長側壁には幅 20~40cm、床面からの高さで 20~45cm の半らな割石を用い、南側長側壁に 9 石、北側に 7 石が残っている。各板石は盛土中に 10cm 程度埋めている。これに対して西側小口には長さ 20~30cm、高さ 10cm ほどの 2 石を並べて置く。この小口石の上面レベルは長側壁より 15cm ほど低く、構築時の状態を保っているかどうか疑問である。

床面は盛土面をそのまま用い、現状では東側が数 cm 低くなっている。また、長側壁に沿って小さな割石、礫が検出された。礫の上面レベルは一定せず、床面から浮いたものもあることから、石棺内に木棺の使用を想定し、石棺との間に詰められたものと考えることができるかもしれない。



第7図 西土居2号墳々丘土層実測図（2）



第8図 西土居2号墳石棺実測図



第9図 西土居2号墳内遺物出土状態実測図

い。その場合、木棺は、西側での幅約35cm、東側での幅約45cm程度が想定される。

石棺を構築するための掘り形は全く検出されなかった。盛土前の旧表土から石棺床面まで20~30cmであり、長側壁は10~20cmほど盛土した段階で立て並べ、盛土しながら外側を埋めている。(第7図)。

2号墳の石棺内部から多くの副葬品が出土した。石棺西側小口近くでは、杯蓋をかぶせた芯と短頸壺が両方に置かれ、短頸壺の下に刀子があった。南側長側壁の中央部では、鉄斧1・のみ1・鉄鎌7がまとまって出土した。そして、17の鉄鎌には人骨の破片が鍛着し、これに対応する北側長側壁近くにも人骨片が検出された。

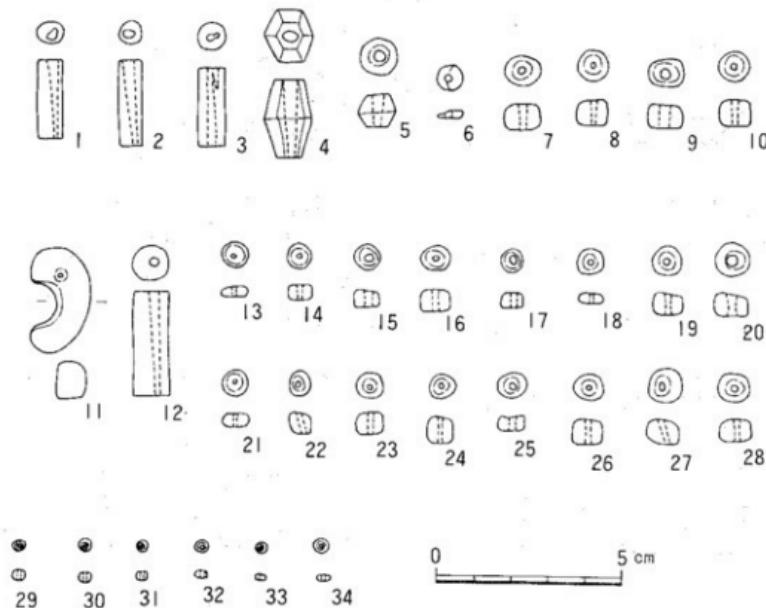
石棺東側では碧玉管玉3・水晶切子玉1・水晶そろばん玉1・滑石白玉1・ガラス玉5が散在し、北側長側壁の東部でも鉄斧1・刀子1・金具1などが出土した。5の須恵器片は杯蓋(1)に接合することなどからみて、副葬品のすべてが副葬状態を保っているとは考えられないが、比較的旧状を保っていると考えて良い。

また、玉類を除く副葬品のほとんどが側壁沿いの礫上から検出されたので、石棺内に木棺が納められていたとすれば、鉄製品や須恵器などは棺外に副葬されていたことになろう。

石棺は東側が幅広であることや、玉類も東側にみられることなどから、遺体は東枕であったと考えられる。

以上の副葬品のほか、北東部と南西部の周溝埋土中から須恵器品が出土し、南西部周溝埋土からは石鎌1・素焼土器数片も検出された。

**出土遺物 (第10図1~10・第11図・第12図8~18・第4図14~17)** 玉類 (第10図1~10) はすべて石棺内から出土した。碧玉管玉3・水晶切子玉1・水晶そろばん玉1・滑石白玉1・ガラス玉5がある。それぞれの計測値は第1表のとおりである。1・2の管玉は片側穿孔である。3は両方から穿孔するが、一方の孔はくいちがっている。水晶製の切子玉・そろばん玉は共に片側穿孔である。6の滑石白玉は片面の一部が剥離している。



第10図 西土居古墳群出土玉類実測図

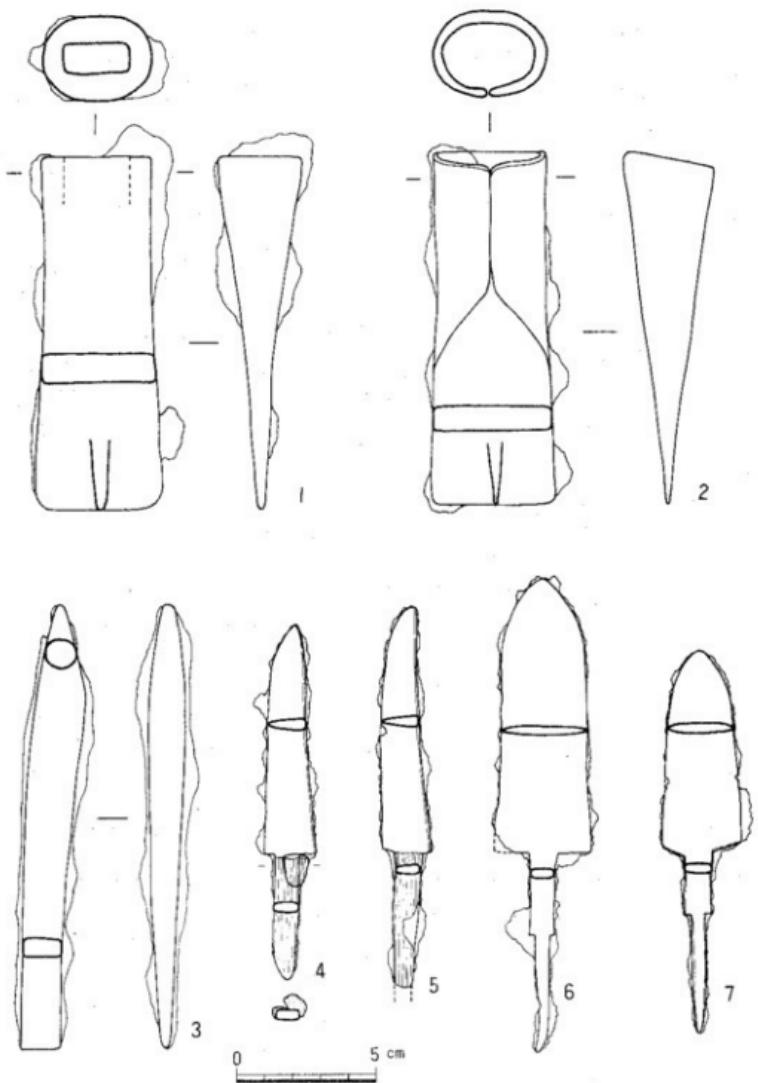
実測図 番号	名 称	長 さ	直 径	出土状態 図番号	色 漆・その他の 特徴
1	碧玉 管玉	21.35	6.55~6.7~6.25	25	透明
2	碧玉 管玉	23.2	6.8~7~6.95	27	淡緑色に白線色のシマ目・片側穿孔
3	碧玉 管玉	21.6	7.4~7.9	29	淡緑・両面穿孔・失敗穿孔あり
4	水晶切子玉	21.45	13.35~15.2	28	透明・片側穿孔
5	水晶そろばん玉	9.6	10.5	20	透明
6	滑石円玉	2.6	6.5~7.0	26	淡灰緑色
7	ガラス玉	7.6	8.4~9.9	21	あい色
8	ガラス玉	6.45	7.9~10.1	31	あい色
9	ガラス玉	6.7	8.45~8.55	32	あい色
10	ガラス玉	7.05	8.0~8.45	19	あい色
—	ガラス玉	7.5	9.55~8.9	30	あい色

(単位mm)

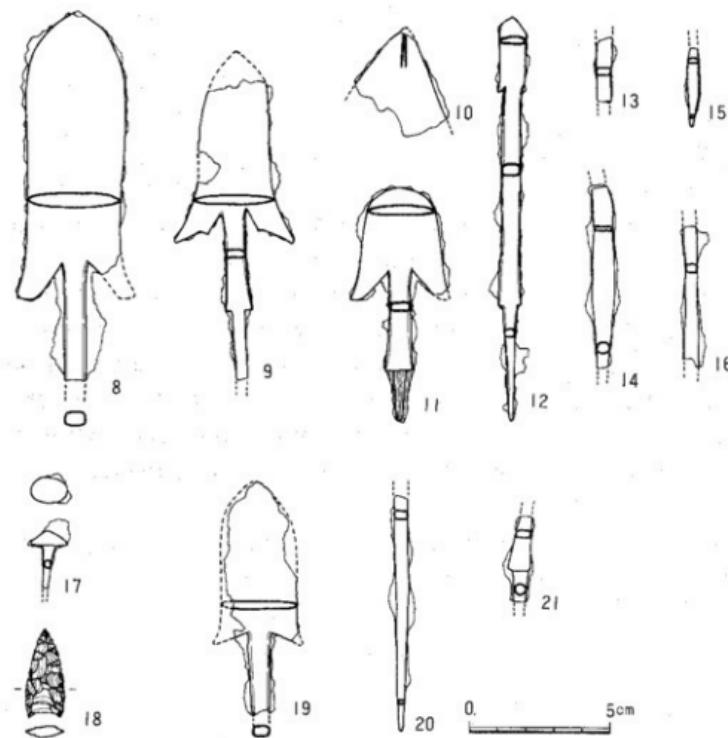
第1表 西土居2号墳出土玉類計測表

鉄器（第11図・第12図8~17）には、鉄斧2・のみ1・刀子2・鉄鎌7以上・金具1がある。鉄斧（第11図1・2）はいずれも袋部を持つ。1は長さ12.5cm、刃部の幅4.5cmで、袋部は厚く、鍔のためか折返しの継ぎ目は観察できない。2は長さ12.5cm、刃部の幅4.4cmで、1とはほぼ同じ大きさであるが、薄手のつくりである。

のみ（3）は長さ15.8cm、刃部の幅1.4cmである。細長い鉄棒の一端を平たい刃部とする。歯骨の柄が付着している。



第11図 西土居古墳群出土鉄器実測図 (1)



第12図 西土居古墳群出土鉄器実測図（2）

刀子（4・5）のうち、4は短頸壺の下から出土したもので、完形である。長さ16.5cm、幅は刃部中央部で1.4cmである。関は直角で、柄の木質が關付近に残っている。5は4よりわずかに大きく、茎の先端を欠失する。

鉄錐（第11図6・7・第12図8～16）は7個体以上出土したが、6個体は広根錐で、細根錐は1個体しかなかった。6・7は剣先形の大きくて平たい錐身に短い笠被と茎を持ち、錐身と笠被の境は直角ないし斜になっている。6は全長16.7cm、錐身の長さ9.7cm、幅は約3.1cmである。7は全長13.5cm、錐身の長さ7.2cm、幅は中央部で約2.6cmである。第12図8は剣先状の幅広の錐身に大きな逆刺を持ち、9は二段にえぐられた大きな逆刺を持つ。11は錐身が短く、先端は尖らない。全長8.3cm、錐身の長さ4cm、中央部での幅約2.8cmで、逆刺はさらに開く。12は細根

鎌で、小さな逆刺を持つ。鎌身部は片丸造りで、刀部は側面にはつけられていない。全長14.3cm、鎌身部の長さ2.65cm、長い範被を持つ。

金具(17)は鉢に似ており、長円形の頭部の中心から、現存で長さ1.5cmほどの身部がのびている。棺金具であろうか。

須恵器(第4図14~17)には、杯蓋・短頸壺・壺・甕が各1ある。

杯蓋(第4図14)は、壺(16)の蓋として用いられていたもので、口径14.7cm、高さ4.6cmを計る。天井部の下端付近と口縁部内側には鈍い沈線が施されている。天井部内面には叩き痕が残る。外面のヘラケズリは時計まわりで、1号墳のものと反対である。

短頸壺(15)は口径7.8cm、体部最大径14.7cm、高さ9.8cmで、体部最大径よりやや下には部分的にカキ目が残る。外面底部付近は逆時計まわりのヘラケズリ、他はヨコナデで調整する。

壺(16)は、頭部が短く外反し、玉縁状の口縁を持つもので、口径9.7cm、体部最大径13.8cm、高さ11.1cmである。頭部から体部中央付近にかけてカキ目が施され、部分的にヨコナデで消されている。外面底部付近は逆時計まわりのヘラケズリで調整され、内底面には叩き痕が顕著である。

甕(17)は周溝北東部の埋土中から出土した。復元口径27cmで、口縁部の断面は長方形ぎみに肥厚する。

石鎌(第12図18)は、サスカイト製の打製四基鎌で、長さ3.15cm、最大幅1.4cm、基部はやや狭くなつて1.15cmの幅である。両面とも、両側からの細かな加工を施している。

#### 4. 3号墳

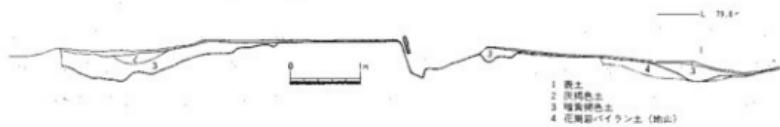
埴丘及び内部主体(第13図) 2号墳から5mほど離れた位置に、南北に延びた南北約1.6m、幅約1.05m、深さ5~10cmの、長方形に近い不定形の落込みが検出されたが、埋葬主体である確証は得られなかった。また、盛土は全く認められず、3号墳は古墳でない可能性が強い。したがって、4号墳との間の溝は、4号墳に伴うものと考えておきたい。



第13図 西土居3号墳土壤状落込み実測図

## 5. 4号墳

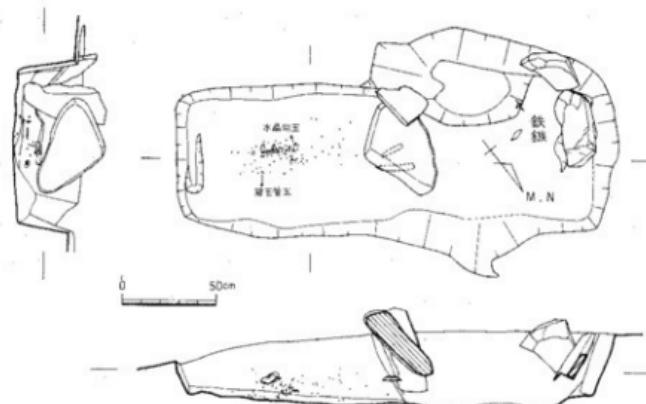
**墳丘（第14図）** 3号墳に隣接し、地形はわずかに円墳状をなす。盛土はすべて流失していた。中央部に箱式石棺の掘り形があり、北東部と南西部で溝の一部が検出された。墳丘の大部分が工事区域外となるため部分的な発掘しかできなかつたが、北東部の溝が東側で消えることからみて、2号墳と同じく、丘陵の基部側と先端側を溝状に浅くカットして、円墳状の墳丘を構築したものと考えられる。南西から北東にのびる丘陵の方向で、両溝の最深部間の距離は約 8.1mである。



第14図 西土居4号墳々丘土層実測図

**内部主体及び遺物の出土状態（第15図）** 箱式石棺を内部主体とするが、かつての盗掘によって石材はすべて抜かれ、掘り形埋土中から板状安山岩の小破片が少量出土したのみである。この盗掘時か、その後、掘り形北西部を一部掘り広げ、板状安山岩や花崗岩平石で小規模の石囲いが作られた。用材は石棺石材の転用と思われる。そして、この内部に土師器壺（第4図18）が置かれていたが、1号墳の破壊直後に、ここから掘り出されている。

石棺掘り形は長さ約2.35m、中央付近の幅約 0.8m、深さは北西部で 0.4m、南東部で 0.17m を計る。掘り形の両端で深さが異なるのは、南東部で床面が 8 cmほど高くなると共に、掘り形上縁が15cm以上も低くなるためである。



第15図 西土居4号墳石棺掘り形及び遺物出土状態実測図

掘り形の埋土から、少量の須恵器片・鉄鏃片が出土したほか、中央部で人骨片2が出土した。また、掘り形南東部では下顎骨の周囲を中心に、水晶勾玉1・碧玉管玉1・ガラス玉120が比較的密集して検出された。したがって、遺体は東南部を枕にして埋葬されたと考えられる。

以上のほか、周溝北東部と南西部から少量の須恵器片が検出された。さらに調査終了後、石棺掘り形北側の、周溝と思われる場所（工事区域外）から、須恵器大形甕・横瓶が偶然発見されたほか、南東部の墳丘下斜面で、須恵器提瓶が工事中に発見された。

**出土遺物（第10図11～34・第12図19～21・第4図18・19・第5図）玉類**（第10図11～34）は、水晶勾玉1・碧玉管玉1・ガラス玉120が出土した。各々の計測値は第2表のとおりである。

水晶勾玉と碧玉管玉は共に片側穿孔である。ガラス玉は藍色が108個で最も多く、わずかに緑色味をおびた蓝色が6個、淡緑色が5個、黄色が1個ある。蓝色のガラス玉は長さ1.7～8.95mmまであるが、3.75～6.7mmのものが多い。これに対して他の色調のガラス玉は小さく、長さ2～3mmのものが多い。

4号墳から出土した玉類の純延長は58.665cmとなり、首飾りとして十分な長さである。出土状態からみても、これらが首飾りとして用いられた可能性はきわめて大きいものと考えられる。

**鉄鎌**（第12図19～21）は、鎌身部（19）と莖被（21）、茎（20）が1点ずつ出土したが、別個体である。19は逆刺を持った広根鎌で、鎌身の長さ約6.3cm、中央部での幅約2.7cm、横断面は薄い凸レンズ状である。

**土師器壺**（第4図18）は石棺掘り形の北西部につくられた石窓の中に安置されていたものであるが、1号墳の破壊直後に盗掘されて出土した。球形の体部に直線的にのびる口頸部を持ち、口径は16cm、体部最大径17.7cm、高さ22.1cmである。頸部内面は磨滅のためはつきりしないが、外面はヨコナデの上に縦の粗いヘラミガキを施す。体部外面の上半は横のヘラミガキ、下半は向って右へ向うヘラケズリを施している。体部内面はナデによる調整で、上半は粘土の粒目が著しい。

**須恵器**（第4図19・第5図）は石棺掘り形埋土中からも小破片が出土したが、大部分は周溝からの出土である。

**口頸部**（第4図19）は周溝北東部の出土である。小破片の復元で、口径11.8cmを計る。第5図2に図示した横瓶の口頸部の可能性がある。

**提瓶**（第5図1）は、4号墳南東部の墳丘下斜面から調査後の土取り工事によって発見された。4号墳の墳丘上か、周溝東南部などにあったものが、墳丘の流失等によって転落した可能性が強いものと思われる。口径12.2cm、高さ30.6cmで、肩部には環状の把手を持つ。体部外面には、平行の叩き目の上に同心円のカキ目を施す。

**横瓶**（2）は、甕（3）に重なって出土した。口径11.2cm、高さ28.6cmで、体部は長径35.6cm、短径25.8cmを計る。体部外面は平行叩き目が認められる。

**大形甕**（3）は、墳丘北側の周溝と思われる部分から発見された。この部分は調査地区外とな

No.	実測番号	長さ	直 径	色 調	No.	実測番号	長さ	直 径	色 調
1		鉛		銀	64		4.50	6.0 ~ 6.55	あ
2		鉛		銀	65		5.75	6.45 ~ 7.5	い
3	12	28.7	9.0 ~ 9.25	淡緑に濃緑が大斑状に入る	66		7.8	7.2 ~ 8.1	色
4	13	3.85	6.85 ~ 7.3	あい	67		6.3	6.25 ~ 6.45	色
5	21	4.75	7.0 ~ 7.3	リ	68		5.1	6.35 ~ 7.05	色
6	14	4.5	6.75 ~ 7.0	リ	69		4.5	6.75 ~ 7.0	色
7	28	6.1	8.4 ~ 9.0	リ	70		2.95	4.15 ~ 4.4	色
8	15	5.0	6.85 ~ 7.4	リ	71		7.95	9.05 ~ 10.4	色
9	24	7.5	7.2 ~ 7.85	リ	72		5.75	7.5 ~ L	色
10	33	2.45	3.65 ~ 3.7	わずかに緑色味をおびたあい色	73		7.25	9.45 ~ 9.75	色
11		2.15	3.45 ~ 3.6	淡緑	74		6.7	7.65 ~ 8.25	色
12		3.45	3.4 ~ 3.45	あい	75		2.25	3.5 ~ 3.9	色
13		4.15	5.8 ~ 6.8	リ	76		4.7	7.1 ~ 7.25	色
14		6.45	6.55 ~ 7.6	リ	77		4.85	7.15 ~ 8.1	色
15		2.2	3.5 ~ 3.6	リ	78		2.35	4.0 ~ 4.05	色
16		3.8	6.5 ~ 7.0	リ	79		4.8	6.0 ~ 6.25	色
17		5.7	7.15 ~ 7.5	リ	80		4.05	7.0 ~ 7.2	色
18		1.9	3.45 ~ 3.65	リ	81		6.5	8.5 ~ 8.85	色
19		3.05	4.05 ~ 4.15	リ	82		6.65	8.5 ~ 9.15	色
20	20	5.85	9.35 ~ 9.6	リ	83		6.7	7.9 ~ 8.7	色
21	17	4.35	5.85 ~ 6.35	リ	84		7.9	7.95 ~ 8.2	色
22	32	2.3	3.7 ~ 4.05	淡緑	85		4.0	6.3 ~ 7.0	色
23	27	6.6	9.0 ~ 9.6	あい	86		6.5	8.5 ~ 9.15	色
24	26	7.6	7.15 ~ 8.15	リ	87		5.95	8.45 ~ 8.5	色
25	16	6.05	7.0 ~ 7.75	リ	88		6.7	7.55 ~ 8.15	色
26	11	26.7	9.5 ~ 12.1	透	89		4.85	8.35 ~ 8.5	色
27	18	3.75	7.15 ~ 7.25	あい	90		5.95	6.6 ~ 7.15	色
28	19	5.4	7.65 ~ 8.0	リ	91		2.55	3.5 ~ 3.7	色
29	22	5.75	6.6 ~ 7.6	リ	92		6.0	7.15 ~ 7.9	色
30	33	6.0	7.4 ~ 7.6	リ	93		5.75	7.55 ~ 8.15	色
31		5.2	7.1 ~ 7.5	リ	94		3.55	7.0 ~ 7.15	色
32		5.5	6.2 ~ 6.35	リ	95		4.5	7.5 ~ 8.1	色
33		2.55	3.45 ~ 3.6	リ	96		4.95	6.35 ~ 6.85	色
34		3.95	5.6 ~ 6.25	リ	97		4.7	6.5 ~ 7.5	色
35		6.2	6.55 ~ 7.25	リ	98		5.0	7.2 ~ 7.9	色
36		5.45	6.1 ~ 6.2	リ	99		1.55	3.2 ~ 3.5	あい
37		4.65	6.6 ~ 7.15	リ	100		4.3	6.0 ~ 6.35	色
38		2.7	3.8 ~ 4.05	淡緑	101		3.75	6.8 ~ 7.0	色
39		5.7	7.45 ~ 8.45	あい	102		4.95	6.2 ~ 6.8	色
40		3.1	3.45 ~ 3.5	淡緑	103		2.5	3.9 ~ 4.0	色
41		5.5	6.95 ~ 7.5	リ	104		1.75	3.3 ~ 3.45	淡緑
42		1.9	3.6 ~ 3.7	リ	105		2.35	3.75 ~ 3.85	あい
43		鉛		銀	106		4.4	6.2 ~ 6.7	色
44		小破片	あ	い	107		4.5	6.5 ~ 6.7	色
45		4.6	6.5 ~ 7.1	リ	108		3.15	3.8 ~ 4.2	あい
46		2.8	3.6 ~ 3.8	リ	109		4.35	7.0 ~ 7.15	色
47		6.6	10.0 ~ 10.05	リ	110		3.85	7.0 ~ 7.35	あい
48		4.6	6.7 ~ 6.9	リ	111		1.7	2.05 ~ 2.9	色
49		5.9	6.3 ~ 6.9	リ	112	34	2.4	4.15 ~ 4.4	色
50		5.4	6.05 ~ 6.45	リ	113	25	4.35	6.95 ~ 7.75	色
51		5.9	7.15 ~ 7.3	リ	114	31	2.85	3.75 ~ 3.85	黄
52		3.2	5.1 ~ 5.8	わずかに緑色味をおびたあい色	115	29	3.0	3.65 ~ 3.7	あい
53		8.95	10.0 ~ 10.5	あい	116	30	2.65	3.6 ~ 3.7	色
54		5.1	6.55 ~ 7.5	リ	117		3.75	6.65 ~ 6.8	色
55		5.9	6.75 ~ 6.85	リ	118		2.5	3.0	あい
56		6.35	8.35 ~ 8.55	リ	119		4.45	6.55 ~ 7.4	色
57		5.25	8.0 ~ 8.2	リ	120		4.55	6.55 ~ 7.2	色
58		4.6	6.45 ~ 6.65	リ	121		2.25	3 ~ 3.2	色
59		5.0	6.7 ~ 6.95	リ	122		4.3	6.4 ~ 7.15	色
60		2.45	3.35 ~ 4.2	リ	123		3.75	6.0 ~ 6.15	色
61		5.55	5.95 ~ 6.75	リ	124		4.0	6.3 ~ 6.5	色
62		4.8	6.5 ~ 7.2	リ	125		小破片		色
63		5.9	6.55 ~ 7.15	リ					

(3)は岩玉製斧、26は水晶製斧、他はガラス斧  
(なお、26の刃上は直径ではなく、尾部と刃部の幅)

(単位mm)

第2表 西土居4号墳出土玉類計測表

るため発掘調査を行わなかったが、調査後、人頭大の河原石が偶然に発見され、その下から2の横瓶と共に破片が折り重なった状態で発掘された。口径49.6cm、高さ93.3cmの大形品で、頸部外面には18条からなる2段の波状文が施される。体部外面には平行の叩き目が施され、底部は穿孔されている。

## 6. 壱棺（第4図20・21）

6号墳の奥の、本丘陵最高部に近い東側（第1図9）で、過去の開墳中に発見されていたものである。調査中、発見者の教示があり、露出していた破片を採集した。数個体確認できたが、不足部分が多く、復元はできなかった。口縁部（20）と底部（21）は胎土、焼成が同じで、同一個体と思われる。採集された破片のほとんどはこれの破片であると考えられる。口縁部は二重口縁で、上段は短く垂直に立上ったのち、端部がわずかに外反する。復元口径は24.6cmである。内外面をヨコナナ仕上げとする。底部は直径8.5cmほどの平底で、内外面ともナデで調整する。淡黄褐色～暗黄褐色を呈する。  
(渡部)

## IV ま と め

1号墳出土の杯蓋は口径14cm、器高4.5cm前後の大きさで、口縁内側に稜を持ち、天井部と体部の境にかすかな段や沈線を持つことを特徴とする。これに対して2号墳の杯蓋は1号墳と類似するものの、天井部と体部の境の沈線は一層不明瞭で消滅ぎみとなり、一部は天井部にまたがるなど粗雑に施されている。また、本調査後に発掘された6号墳からは、立上りが低くて底部外面をへら切りした杯身が出土している。4号墳からは杯が出土しなかったものの、口縁部の断面を長方形につくる表は、6号墳の杯か、あるいはこれをやや遡る時期に比定できよう。

したがって、1号墳と2号墳は、4号墳と6号墳より古く築造されているが、それと共に、それぞれの前者は後者より若干新しいのではないかと思われる。古墳かどうか不明の3号墳と、時期のわかる須恵器を出土しなかった5号墳の築造時期は明らかにしがたいが、他の古墳のあり方からみれば、西土居古墳群は6世紀後半でも古い時期から6・7世紀の境隈にかけて、丘陵先端から奥に向って形成されたと考えておきたい。

ところで、1号墳出土の杯と類似したものは、坂出市長崎古墳・綾南町浦山5号墳・同10号墳<sup>(1)</sup>3号石室・綾上町今淹古墳・善通寺市正巣山古墳などから出土しているが、今淹古墳の内部主体が横穴式石室ではないかとされている以外は、横穴式石室を持つことが明らかにされている。また、香川県内で横穴式石室が群集墳の内部主体として盛んに築造されるのは、6世紀後半でも新しい時期、すなわち、杯蓋外面の段や沈線、口縁部内側の棱・沈線がほぼ消滅する段階である。

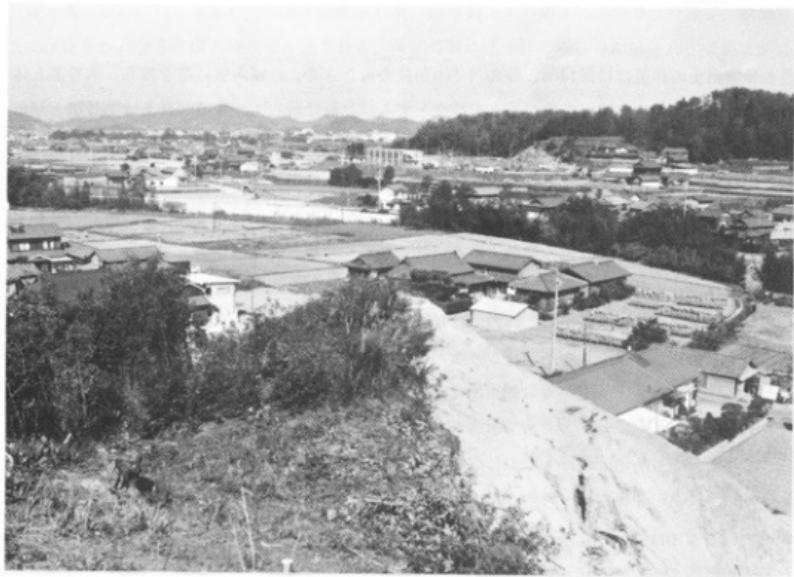
一方、箱式石棺については、6世紀に下ることが確実なものはほとんどなく、これまで6世紀<sup>(2)</sup>中頃の綾南町浦山6号墳が知られていたのみである。ところが今回の西土居古墳群の調査で、6世紀末頃まで下ることが明らかとなった。西土居古墳群は、付近の有力家父長家族の代々の墳墓と考えられるが、すでに横穴式石室が普及し始めた時期に箱式石棺を内部主体として群集墳を形成し始め、6世紀末ないし7世紀初頭になってやっと横穴式石室を採用して終了している。

このように、西土居古墳群は県下における横穴式石室導入の最も遅い例であり、当時の豪財を考えるうえで重視される。

(渡部)

(註)

1. 廣瀬常雄「長崎古墳」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』VI 1983
2. 松本豊胤ほか『浦山古墳群調査概要』1969
3. 渡部明大「香川県における須恵器編年(1)」『香川史学』6 1977
4. 渡部明大「香川県における須恵器編年(1)」『香川史学』6 1977
5. 松本豊胤・東原輝明・森本義臣『正巣山古墳調査概報』1983
6. 註2と同じ



(1) 西土居古墳群の立地（3号墳より1号墳跡・2号墳をみる）



(2) 2号墳の調査風景

図版 2



(1)

2号墳



(2)

2号墳石棺と遺物出土状態

図版 3



(1) 2号墳石棺内遺物出土状態（須恵器）



(2) 2号墳石棺内遺物出土状態（鉄斧・刀子）

図版 4



(1) 4号墳(手前)及び3号墳(調査前)



(2) 3号墳土壙状落込み

図版 5



(1) 4号墳内部主体



(2) 4号墳勾玉・ガラス玉出土状態

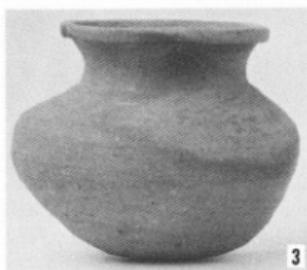
図版 6



1

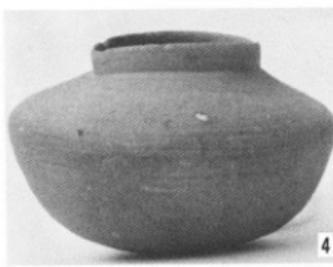


2

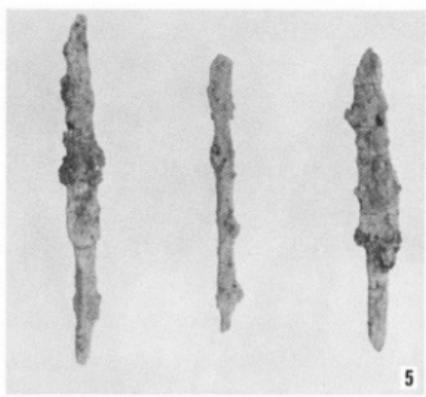


3

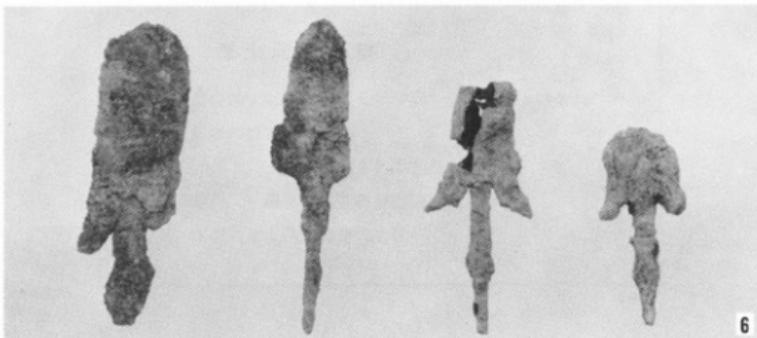
西土居古墳群出土遺物  
(1・2 1号墳, 3~6 2号墳)



4



5



6

## 西土居古墳群

—香川県木田郡三木町大字井戸字西土居における群

集墳の調査—

1983年3月

発行 西土居古墳群発掘調査団

印刷 太陽印刷株式会社